

『愛蝕』

著：桂生青依

ill：北沢きょう

しかしあと少しで『綾華』が入っているビルが見えてくるといとき。

「!？」

いきなり、背後から腕を掴まれた。

驚いて振り返れば、そこにいたのは坂条だ。

相変わらず二人の男を連れているが、その表情は不機嫌そうだ。

「っ…なんだよ！」

春真は振り払おうと腕を振ったが、坂条の手は離れない。

『綾華』に行ってからのことを考えるのに夢中で、背後の気配に気付かなかった自分への恨み言を胸の中で繰り返しつつ、春真は坂条を睨み付けた。

「離せよ！ なんのつもりだ!？」

そして再び腕を大きく振り、声を上げる。しかし坂条の手はびくともせず、それどころかますますきつく掴まれる始末だ。

痛みに春真が顔を歪めると、そのまま、近くのビルに引きずり込まれた。

「はな……離せよ！」

春真は叫んだが、強引に引っ張られ足が纏れる。不気味なほど静まり返っているビルに三人分の落ち着いた足音と、一人分の慌ただしい足音が響く。

やがて、そのうちの一室のドアが開けられたかと思うと、中に引きずり込まれ、事務所のようなそのソファに突き飛ばされた。

「うわっ」

やっと手は離れたものの、今度は投げ出された痛みと衝撃に眉間に皺が寄る。

それでも、体勢を立て直しながら素早く振り返ると、前を塞ぐようにして立つ坂条をギッと睨み上げた。

肌で感じる気配では、ここは今は使われていない事務所のようだ。人けがまったくない。

しかしそのわりに埃がなく綺麗だということは、故意に空けてある事務所なのだろう。(こいつが持ってる事務所の一つってことか……?)

考えていると、坂条は鋭い視線で見つめ返してきた。

「この件には関わるなど言っただろう。この辺りをうろちよろするのはやめろ」

そしてきつい口調で言うと、一層目を眇める。春真はそんな坂条を睨み付けたまま立ち上がると、怯まず言い返した。

「俺は俺の仕事をする。この間もそう言ったはずだ」

「……」

「俺はもう、誰かの言いなりになるのは嫌なんだ。一方的な命令で、事実を見て見ぬふりをしたり、隠し事をしようとしたり……」

「素人に首を突っ込まれるのは迷惑だと言ってるんだ」

「俺は素人じゃない！」

「素人だろう。でなきゃ、中途半端な半人前だと言った方がいいか」

「！」

思わず声を呑む。

「……どういう意味だよ」

ややあって春真が声を押し出すと、坂条は「言ったとおりだ」と続けた。

「刑事でもなければライターとしてしっかりとした仕事をしているわけでもない。お前はただ、昔の自分にけりを付けたくて過去を追いかけているだけだ。不毛にな」

「っ……」

「それが中途半端じゃなくてなんだ。家族が聞いたら泣くぞ」

「そんなの、お前には関係ないだろ!？」

家族のことまで言われ、春真は怒りのまま坂条の胸を両手で突く。

その途端、彼の背後にいた二人の男がぴくりと反応したが、坂条は片手を上げてそれを制す。そして、苦笑気味に春真を見つめてきた。

「正義感に燃えるのはいいが……周りを見ろ。やり方が下手なんだ、お前は」

「うるさい！」

春真は声を荒らげた。他の誰かに言われたなら、こうも憤らなかつただろう。だが、相手が坂条だからこそ、凶星を突かれてみっともなく苛立ってしまう。

「どけよ」

春真はぎゅっと唇を噛むと、坂条の身体を押しつけるようにして外へ出ようとする。だが、腕を掴まれ引き戻される。

いたがそのまま抱き締められ、口付けられた。

「んっ——」

強い抱擁と深い口付けに、くぐもった声が零れる。振りほどこうと坂条の身体を幾度となく叩いたが、彼は離れず、それどころか口付けはより深くなっていく。

そして口付けが長く深くなるほどに、引き剥がすつもりだった指には上手く力が入らなくなり、目の前の身体に縋っているだけになってしまう。

「は…なせ…よ……っ」

ようやく唇が離れると、乱れた息交じりに声を上げる。だが返ってきたのは冷たい視線と、「しばらくおとなしくしている」という、再度念を押しするような声だ。

その視線と声に、春真は頭に血が上るのがわかった。

こんな男に——自分を裏切っておいて涼しい顔をしているような男に命令されるなんてまっぴらだ。

「ふざけんな！ 離せよ！」

「春真」

一層暴れると、宥めるように名前を呼ばれる。その声は、昔の彼を思い出させる響きをたたえて身体中を巡り、春真の胸を揺さぶる。

一瞬、思わず抵抗を止めてしまうと、再び口付けられた。

「ん……っんんっ——っ」

捻じ込まれた舌に口内を貪られ、身体の奥が熱を持ち始める。駄目だと思うのに、膝から力が抜けそうだ。

酔いそうになるほどの快感と官能。しかし春真は懸命に抵抗すると、重ねられている唇に歯を立てた。

「っ——」

次の瞬間、低く呻くような声を上げ、坂条が顔を離す。

口の中に鉄の味が広がり、一瞬、春真は自分が彼を傷つけてしまったことに慄いたものの、その隙に彼の腕の中から身を翻す。

しかしすぐに捕まり、そのまま床の上に引き倒された。

「痛っ……！」

背中が、肩が冷たい床に打ち付けられ、春真は顔を歪める。

だが坂条はそのままのし掛かってくると、春真が纏っていたシャツを手荒く引き裂いた。

「な……っ」

春真が驚きに上擦った声を上げたと同時に、坂条が「おい」と短く鋭く言う。

それが、部屋のドアの辺りで控えていた男たちに言ったものだと言ったのは、彼らが出ていったあとだ。

二人きりになった部屋に、息と衣擦れの音が響く。

「離せよ……っ、どけよ！」

そんな中、春真は死にものぐるいで抵抗した。

頭の中では「まさか」と同じ言葉が回り続けている。

まさかそんなわけはないだろう。

まさかそこまではしないだろう。

まさか——。

しかしそんな春真の思いを嘲笑うように坂条は春真の上体を裸にしてしまうと、裂いたシャツで春真の腕を縛ってしまう。

次いでじっと春真を見下ろすと、血の滲んだ唇のまま口付けてきた。

「う……んう……っ」

仄かな鉄の匂いが鼻に抜け、ぞくりと背筋が震えた。

本文 p35～40 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>